

Shake Hands 常滑国際交流協会



第124号 2019年7月6日発行

〒479-0837 常滑市新開町 5-58 電話・FAX：0569-34-4797

E-メール：ホームページ：<http://www.japan-net.ne.jp/~tia/>



2019年度 第2期 接客英会話講習のお知らせ

常滑国際交流協会では、海外からのお客様との有意義な国際交流の出来る人材育成を目指して「接客英会話講習」を行っています。下記により2019年度第2期の「接客英会話講習」の参加者を募集します。

記

第2期日程：毎回水曜日、(全12回)

9月25日、10月 2日、10月 9日、10月16日、10月23日、10月30日
11月 6日、11月13日、11月20日、11月27日、12月 4日、12月11日

時 間：午前10時～12時

場 所：とこなめ陶の森・資料館2階 講座室

講 師：Jason Ford さん・他 (H.E.Art 英会話)

募集人員：30名 (定員になり次第締め切ります。)

参加費：12,000円 (常滑国際交流協会の会員は10,000円)

この第2期から受講の方はテキスト代：テキスト代2,340円

*常滑国際交流協会の個人会員の年会費は2,000円です。

*まだご入会いただいていない方はぜひこの機会にご入会下さいますようお願い申し上げます。

申込み：常滑国際交流協会へ氏名・住所・電話番号・メールアドレスをご連絡下さい。

〒479-0837 常滑市新開町 5-58 常滑商工会議所内 **常滑国際交流協会**

電話・FAX 0569-34-4797 メールアドレス tia@japan-net.ne.jp

2019年度 常滑国際交流協会 理事会・総会の報告
5月25日（土）とこなめ陶の森資料館

総会に先立ち 9:30 から 2 階会議室で理事監事 13 名の内 10 名の出席で理事会を開催。総会議題を審議、承認の議事終了の後、各理事からコメントをいただきました。10:20 終了。

10:30 からは講座室に会場を移して総会を開催。出席者は 30 名。議長は鯉江会長。まず第 1 号議案の 2018 年度事業報告、決算報告。事業活動の報告は画像映写し、報告説明は衣川運営委員。報告事項の報告の後、承認されました。続いて 2019 年度事業計画と予算案、役員改選案も承認され無事総会の議事を終了しました。議事の終了後、来賓として伊藤辰矢新市長と杉江繁樹新県議からご挨拶をいただきました。



総会の議事終了後、総会催事の陶芸家の大原光一さんの講演会に移りました。

大原光一さん（45 歳・東京出身）は市内古場町に在住で、演題は「常滑との縁、世界との縁」。大原さんは大学中退後に日本中の陶業地を訪ねる中で常滑出身の写真家藤井友樹氏と出会い、常滑に来て独立しました。海外での活動などについては画像を使って紹介されました。韓国の窯を訪ね歩いたこと。IWCAT の活動に参加し、海外の多くの知己を得たこと。IWCAT の事業が終了した後も IWCAT の参加者からの依頼でシカゴでの 2 ヶ月のワークショップに参加したこと。その後もトルコ、スウェーデンなどで多くの作陶体験をしたこと。特にアメリカで驚いたことは、芸術活動は多くの個人応援者が支えていること、などを紹介して約 50 分間の講演を終えました。



中国ジンハン小学校派遣団の受入事業

大野小学校国際交流委員会 委員長 フォン晴子



昨年末から進めてきた中国ジンハン小学校と大野小学校との交流事業が、年明けから一気に加速し、いよいよ派遣団を迎え入れるとなった新学期。そこからあっという間に空港でのお迎えとなり、大野小では初めてのお隣の国 中国からの派遣団との生活が始まりました。言葉の壁が大きく立ちましたが、不思議と漢字で書くと意味も通じることも多く、見た目も生活習慣も似ているこの派遣団との二週間は、リラックスして接することができたように思います。

4人の女子児童、一人の男子児童の計5人。二人の女性リーダーが指示を与えると、すっと動き、それぞれに控室で勉強をしたり本を読んだりする姿に、非常に優秀で教育の行き届いたお子さんたちという印象を受けました。市長表敬訪問や、学校でのカルチャーショーでは、それぞれに一芸に秀でた派遣団のメンバーが詩の朗読や舞踊、ピアノ演奏などを披露したり、また、マイクを向けるとしっかりと自分の意見をまとめて言うことができる子供たちでした。学校ではおとなしい印象を受ける子も、ホストファミリー宅ではそれぞれに家族とゲームをしたり、おしゃべりしたりして、楽しい時間を過ごせたようです。

やぎもの散歩道の散策や、ミツカンミュージアム見学、着物着付け体験。それぞれ楽しんでいただけたようで計画した私たちもほっとしました。また学校では、家庭科でお茶の淹れ方などを教える授業に参加したことで日本の小学校の授業について、中国では知識を詰め込むことが主になっており、こういった生活の作法を教えません。とても大事なことだと思います。と、非常に感心してくれました。また、子供たちが協力し合う姿が素晴らしいとほめて頂きました。ホストファミリーには、大野地区に住む中国の方にもなって頂いていたため、なにか質問があれば聞いて頂く事もでき、この国際交流事業が、ただ外国からのお客様とのやり取りだけでなく実際に日本に住む外国の方々からも色々な情報を交換したりする場となり、新たな発見や気づきも多く頂くことができました。

たくさんの中国の方も近くに住むようになっている昨今ではありますが、実際に交流する機会もなかなかなく想像の上での中国しか知っていませんでしたが、私たちも大野小の子ども達も、そしてまた、派遣団もお互いを知り、個々での交流により新しい未来を築いていくことができるのだと改めて思います。

こうした機会を与えてくれた TSIE の活動に感謝いたします。



TSIE 2019年度 派遣受入事業について

2019.06.29 TSIE 事務局長 田中早苗

2019年度は、海外の学校4校（中国・インド・マレーシア・タイ）と常滑の学校8校による往復交流を予定していました。

しかし、2018年の11月、中国より8月の受入は難しいとの連絡がありました。2017年の中国派遣時は、8月21日（月）～26日（土）の6日間、学校に登校する事ができました。しかし、2019年度は中国の教育方針が変更となり、8月の休暇中に学校を開放する事が不可能となりました。結果、2019年度の中国への派遣を中止する事となりました。

そして、2019年2月、インドとパキスタンの紛争が勃発しました。TSIEでは、何度も意見交換を重ね、子ども達の安全・安心を最優先し、インドへの派遣を中止する事としました。

中国・インドへの派遣が中止になり、派遣できる学校を探しました。

様々な方のご協力のおかげで、中国・インドへの派遣をメキシコ・マレーシアへの派遣に変更できるようになりました。航空券の手配も整い、順調に準備が進んでいました。

しかし、5月末日、メキシコの政府がスクールカレンダーを変更し、学校開始日が8月20日から26日に変更になったと連絡がありました。本来ならTSIEは、学校に登校できない交流は認めていませんが、今年度のメキシコ派遣に関しては、何らかの形でメキシコの学校の子供達と交流できるよう努力してもらう方向で現在準備を進めています。

アメリカ、中国、メキシコは夏休みが同じ時期なので、常滑から派遣する事が難しいのが現状ですが、常滑市の子供達に国際交流の機会を与えられるよう、これからも努めていきます。

直流～交流

オリンピック・チケットの記憶

来年の東京オリンピック・チケットの予約当落の発表がありましたね。

皆さんの中で予約登録した人がいますか？私はお金がないし、人混みも苦手だし、何よりネットが使えないので全くの無関係者ですが、昔の話、1998年の長野冬期五輪でのチケットに思い出があります。

その前年、私は市全体の商店街年末売出しの一等賞の「長野五輪観戦ツアーに一泊で40名様ご招待」の担当者だったのです。私の企画案だったので夏前から旅行社に「なるべく安いチケットを40枚」と注文していました。その結果「2月12日アイスホッケー男子予選、国未定、1万円席10枚、8千円席30枚」が購入できました。

ところが我々商店街は公式スポンサーではないのでPRチラシなどに五輪マークはもちろん、オリンピックとか五輪の文字も一切入れることができず、しかたなく「長野で2月に行われる冬期国際スポーツ大会」と表記するしかありませんでした。

売り出し後の抽選は番号式のため、抽選券の売り上げ枚数とにらみあわせて当選申出者が40名弱になるようにしなければなりません。これで1番苦労しました。結局申出数は23名だけ。自費参加者3名、引率役員3名を加えてバス1台で出発。1万円と8千円の席は前夜のくじ引きで決定です。旅行社の添乗員、ガイド、バスの運転手さんを加えてもまだ8千円券が8枚も余っています。

このままだと無駄になってしまうので、競技会場の外で「券あります」のプラカードを立てていたが、観光客とおぼしき西洋人のグループが合計65,000円で買い取ってくれたのです。（1,000円もうかった！）席番号は続きなので、あのグループ来るものと思っていたら、来たのは日本人。聞いてみると、外国人から1枚15,000円で購入したとのこと。あれは観光客を装った外国人ダフ屋だったのか！

試合はラッキーなことに日本vsオーストラリア。さらにラッキーなことに日本が勝利。初めてのアイスホッケーを生で楽しめたのですが、チケットに関しては苦笑するばかりでした。（鯉江）